

【 生神女就寝祭のトロパリ 第1調 】

しよ うし んぢよ よ 、 なんぢは うむ と き ど う て い
 生 神 女 爾 産 時 童 貞

を ま も れ り 、 ね む る と き せ か い を の こ さ
 守 寝 時 世 界 の 遺

ざ り き 。 な あ んぢは い の ち の は は と し
 爾 あ んぢは い の ち の は は と し

て い の ち に う つ れ り 、 なんぢ の き と う を
 生 命 移 爾 の 祈 禱

も っ て わ れ ら の た ま し い を し よ り の が れ し
 以 我 等 靈 死 脱

め た も お う 。
 給

【 生神女進堂祭のコンダク 第2調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い
 光 榮 父 子 聖 神 歸 す 、 い

ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン 。

き と う に ね む ら ざ る しよ うし んぢよ 、 てん た つ に
 祈 禱 に 眠 ら ざ る 生 神 女 轉 達

か わ ら ざ る た の み な る も の お を 、 ひ つ
 變 倚 望 者 の お を 、 ひ つ

ぎ と し と は と ど め ざ り い き 、 け だ し
 死 と は と ど め ざ り い き 、 け だ し

え いてい どうぢよの たいに いりしもの お
 永 貞 童 女 胎 入 者
 は かれをいのちのはは として いのちに
 彼 生 命 母 生 命
 う つしたま え り 。
 移 給

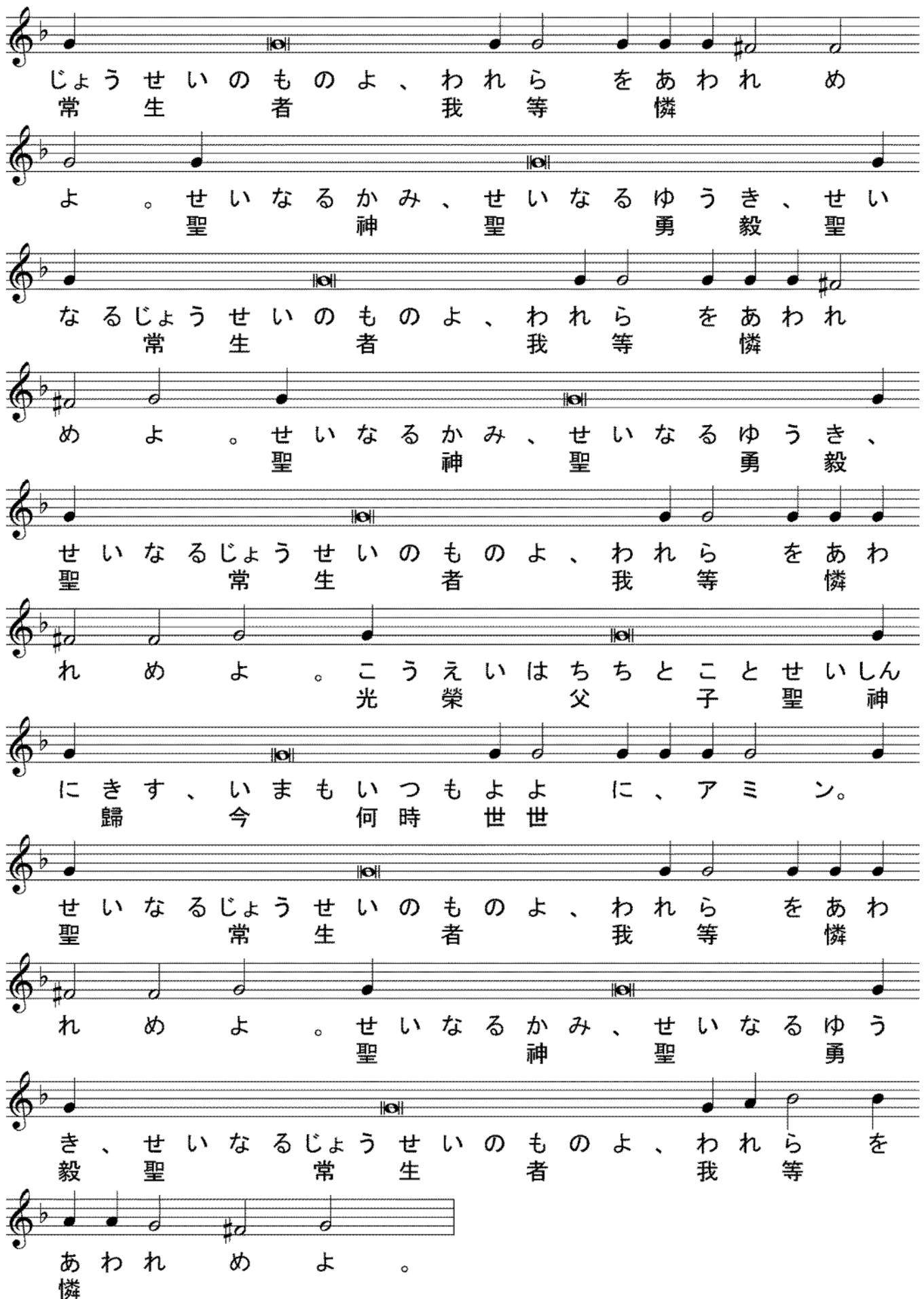
司祭) (黙誦：聖なる神、^{せい かみ せいじゃ うち いこ}聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう}セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより^{さんえい}讚榮せられ、^{ことごと}悉くの^{てんぐん}天軍より^{ふくはい}伏拜せられ、^{ばんぶつ む ゆう}萬物を無より有と
 なし、^{ひと なんぢ ぞう しょう}人を爾の像と^よ肖とに依りて造り、^{つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ}爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す}願う者に智慧と明悟とを與え、^{そのすくい ため つうかい}罪を行^すう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい}我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の^{さいだん こうえい まえ た}光榮の前に立ちて、^{なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの}爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち}主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも^{せいさん うた う なんぢ じんじ}聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ}以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう}を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
^{しんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ}神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい}爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に^{われらこうえい なんぢち こ せいしん けん いま いつ よよ}献ず、今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖



じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常生者我等を憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖神聖勇毅聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常生者我等を憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖神聖勇毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖常生者我等を憐

れめよ。こうえいはちとことせいしん
光榮父子聖神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸今何時世世

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖常生者我等を憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖神聖勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
毅聖常生者我等を

あわれめよ。
憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 第3調 生神女の歌 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

わ が た ま し い は し ゅ を あ が め 、 わ が し ん は
我 靈 主 崇 我 神
か み わ が き ゅ う し ゅ を よ ろ こ べ り 。
神 我 救 主 悦

誦經) 蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂わん、

わ が た ま し い は し ゅ を あ が め 、 わ が し ん は
我 靈 主 崇 我 神
か み わ が き ゅ う し ゅ を よ ろ こ べ り 。
神 我 救 主 悦

誦經) 我が靈は主を崇め、

わ が し ん は か み わ が き ゅ う し ゅ を よ ろ こ べ り 。
我 神 神 我 救 主 悦

【 アポストロス 240端 フィリピ書2章5節~11節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがフィリッピン人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、爾等はハリストス イススの意を以て意とすべし。彼は神の像にして、

かみ ひと 神と匹ひとしくなることを 僭ひとごうとせざりき、然しかれども 己おのれを虚むなしくして、僕ぼくの貌かたちを受け、人ひと
 と同じおなき者と爲なりて、外がい形けいに於おいて人ひとの如ごとくなり、己おのれを卑ひくくして、死しに至いたるまで 順したがい、
 且かつ 十じゅう字じ架かの死しに至いたれり。故ゆえに神かみも彼かれを無む上じょうに高たかくして、彼かれに凡およその名なに超こゆる名なを賜たま
 えり、凡およそ天てんに在あり、地ちに在あり、及および地ちの下したに在ある者ものの膝ひざは、イイススの名なの前まえに屈かがみ、且かつ
 凡およそ 舌したはイイスス ハリストスしゅが主うたるを承みとけ認めて、光こう榮えいを神かみ父ちちに歸きせん爲ためなり。

(比較用 口語訳) キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かさない。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

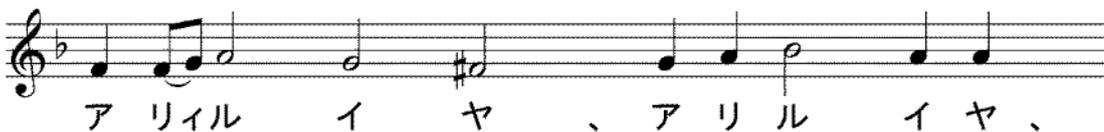
【 アリルイヤ 第2調 】

司祭) 爾なんぢに平へい安あん、

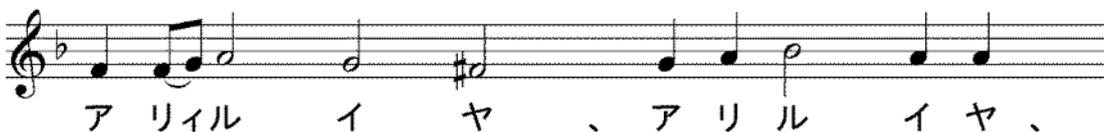
誦經) 爾なんぢの神しんにも、

司祭) 睿えい智ち、

誦經) アリルイヤ、

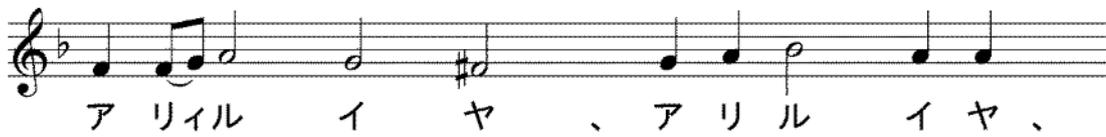


誦經) 主しゅよ、爾なんぢ及および爾なんぢが能の力うりよくの匱ひつは爾なんぢが安あん息そくの所ところに立たてよ、





誦經) 主は眞實を以てダヴィドに誓いて、之に背かざらん、



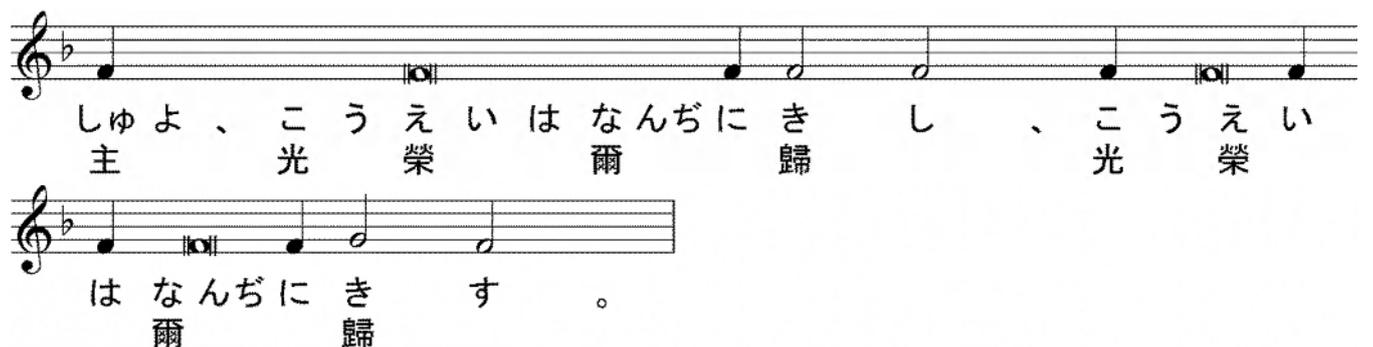
司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書54端 10章38~42節、11章27~28節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時、彼等が行ける時、イイスーの村に入りしに、或婦マル

な もの かれ そのいえ むか そのしまい な もの そく
 ファと名づくる者、彼を其家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イエスの足
 か ぎ そのことば き きょうじ おお よ ころ わづら つ い
 下に坐して、其言を聴けり。マルファは供事の多きに困りて心を煩わし、就きて曰え
 り、主よ、我が姉妹、我一人を遺して供事せしむるを爾意と爲さざるか、之に命じて、
 われ たす かれ こた い なんぢ おお こと
 我を助けしめよ。イエス彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を
 おもんばか ころ ろう しか もと ところ ひとつ よ ぶん えら これ
 慮りて心を勞せり、然れども需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是
 かれ うば ベ これ い とき ひとり おんなたみ うち こえ あ かれ い なんぢ
 は彼より奪う可からず。此を言う時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾
 はら はら なんぢ す ち さいわい かれ い しか かみ ことば き これ まも
 を孕みし腹と爾が嘯いし乳とは福なり。彼は曰えり、然り、神の言を聴きて之を守
 もの さいわい
 る者は福なり。

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ